法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

吉ヶ谷式土器の再検討 ： 甕形土器を対象として

内藤，千紗

(出版者 / Publisher)
法政大学大学院
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
(巻 / Volume)
78
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
19
(発行年 / Year)
2017-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00013825

吉ヶ谷式土器の再検討
－甕形土器を対象として－

人文科学研究科　史学専攻
博士後期課程 3 年　　内藤千紗

はじめに

弥生時代後期の関東地方では各地域で特徴的な土器型式が存在しており、現在の埼玉県北西部を中心に分布する吉ヶ谷式土器もその一型式である。土器のみならず、竪穴建物や墓制、出土遺物についても隣接する東京湾岸系土器群とは様相を異にするが、関東地方各地で吉ヶ谷式土器の客体的な出土も確認できることから、その背景にある人や物も一地域の範囲を超えて広域的に移動していたものと推察できる。

筆者は東日本における弥生時代後期から古墳時代前期にかけての地域社会の変化の多様性を論じることを研究テーマとしており、そうした背景にアプローチするためには、まず検討の土台となる編年観が必要となると考えている。関東地方では該期の土器編年の再構築が説かれており、近年では南関東地方を中心として土器研究が進んでいる。吉ヶ谷式土器の分布する比企・入間地域も例外ではなく、柿沼幹夫を中心に精力的な土器編年研究が進められており、吉ヶ谷式土器の編年観がまとめられつつある。しかしながら、吉ヶ谷式土器の変遷の内実は型式学的に不明瞭な部分も未だ多く、再検討する必要がある。

そこで本稿では、現在の埼玉県北西部に展開する吉ヶ谷式土器を対象に、当該地域の甕形土器の諸属性の変遷を確認することで、従来の変遷案の整理を行うことを目的とする。その後甕形土器の変遷からみた比企・入間地域の弥生時代後期の吉ヶ谷式土器を主体とする遺跡群の動態について検討を加えることで、吉ヶ谷式土器の消長を考えてみるものとしたい。

１．関東地方における弥生時代後期土器研究の現状と吉ヶ谷式土器をめぐる研究動向

1－1．関東地方における弥生時代後期の土器様相理解へのアプローチ

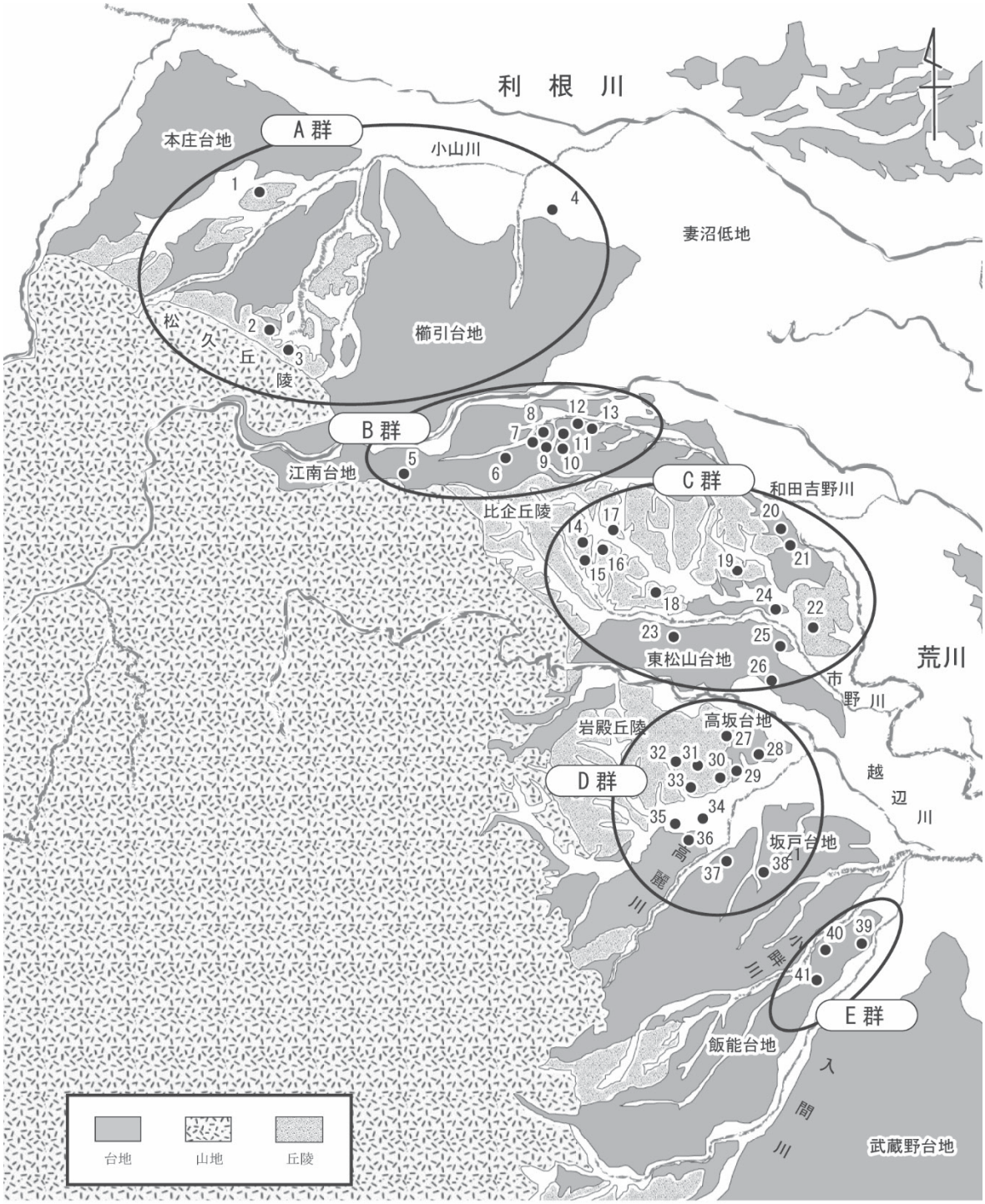
弥生時代後期の土器編年研究は、杉原編年（小林・杉原 1968）の見直し以後、関東地方における弥生時代後期土器研究の停滞とも呼べる時期が続いたが、近年では編年の再編が進み、東京湾沿岸域を中心として各地域の土器様相の共通理解が得られつつある（大村 2004・07・09、古屋 2013・15 等）。それらの編年観を基準とし、東京湾沿岸周辺地域に展開する吉ヶ谷式土器や朝光寺原式土器などとの時間的地域的対応関係を考え、弥生時代後期の土器分布圏同士の関係性を考えていく必要が生じており、各地域における土器の型式学的検討を改めて重要視しなければならないと考えている。

吉ヶ谷式土器の分布の中心は現在の埼玉県北西部に位置する比企・入間地域中心であり、吉ヶ谷式土器は岩鼻式土器に後続する形で弥生時代後期中葉頃から出現し、後期中葉以降、分布の中心域から離れた広範囲に吉ヶ谷式土器あるいは変容したともいえる土器が拡がりを見せ、こうした土器の存在は関東地方ひいては東日本弥生時代後期社会の複雑な動向を捉える上で重要な視点となると考える。

1－2．吉ヶ谷式土器をめぐる研究課題

筆者は以前、吉ヶ谷式土器研究をめぐる各時期の研究課題について北川谷編年との対比を行いながら論じたことがあるが（内藤 2015）、本稿では吉ヶ谷式土器の変遷を検討課題としているため、分布の中心域である比企・入間地域の吉ヶ谷式土器の変遷や編年観をめぐる研究を整理し、その問題点を述べるものとしたい。

吉ヶ谷式土器は、埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡住居址出土遺物を基に認識された土器型式であり（金井塚 1965）、その後吉ヶ谷式土器の型式学的検討とその細分を初めて実践したのが柿沼幹夫である。柿沼はこれまで一括りで捉えられていた吉ヶ谷式土器を、甕形土器を中心にして初めて細分し、今日の編年観の土台となるものを構成した（柿沼 1982）。編年観の軸となる甕形土器の全時期に共通する要素として、上半部を横位の縄文で埋め尽くすことを特徴とし、口唇部には刷毛状工具による刻み、縄文施文、素口縁のものの３種が存在すること、



1. 大久保山	8. 四反歩	15. 芳沼入	22. 八耕地	29. 杉の木	36. 大河原
2. 羽黒山	9. 円阿弥	16. 大野田西	23. 屋田	30. 桜山	37. 花影
3. 神明ヶ谷戸	10. 万願寺	17. 船川	24. 八幡	31. 舞台	38. 一天狗
4. 明戸東	11. 荷鞍ヶ谷戸	18. 大谷	25. 観音寺	32. 根平	39. 霞ヶ関
5. 伊勢原	12. 姥ヶ沢	19. 吉ヶ谷	26. 篭田	33. 駒堀	40. 女堀Ⅱ
6. 焼谷	13. 富士山	20. 玉太岡	27. 高坂二番町	34. 中耕	41. 上組
7. 白草	14. 蟹沢	21. 北廓	28. 大西	35. 稲荷前	

第１図　吉ヶ谷式土器を主体とする遺跡の分布図

内面は丁寧に磨かれることが提示された。また、甕形土器の時期的な変化がみられる要素を 4 点を挙げ、（1）胴部の張りと頸部の外反度が次第に強まる点、(2) 輪積痕が消失していく点、（3）下半部の整形が、ヘラミガキを丁寧に行うようになり、刷毛目を残さなくなる点、（4）縄文施文が次第に粗雑化していく点を挙げている。吉ヶ谷式を杉原編年の後期全般（「久ヶ原式―弥生町式－前野町式」と併行）に位置付けて 3 時期 4 細分し、吉ヶ谷式は岩鼻式と同時期に併存したことを想定した。また、同時期に石岡憲雄も器形の分析から同様の編年観を示している（石岡 1982)。

その後、吉ヶ谷式土器の祖形に関する論が様々出されるなかで[1]、柿沼は吉ヶ谷式出現時期を後期中葉以降に変更する（柿沼 1994・1996)。この段階で岩鼻式から吉ヶ谷式への変遷を想定し、従来の岩鼻式・吉ヶ谷式併存説を訂正することとなる。併せて吉ヶ谷式をこれまでの 3 時期 4 細分から I～Ⅲ期の 3 期区分に修正するが、岩鼻式から吉ヶ谷式への具体的な移行過程の根拠は当時明示されておらず、批判も生じたが、一方で吉ヶ谷式土器成立に関する研究が注目されるようになる。佐藤康二は吉ヶ谷式の高坏の型式組列から、岩鼻式の口縁部にみられる諸要素との関係性を論じ、岩鼻式からの変遷過程を分析する必要性を説く（佐藤 1997)。松本完は東松山市代正寺遺跡を中心として中期後半から後期前半の土器を分析し、宮ノ台式から櫛描文土器の展開過程を示し、その後吉ヶ谷式への変容が認められるとした（松本 2003)。当時岩鼻式から吉ヶ谷式へ移行する明確な資料はなかったが、吉ヶ谷式の成立については岩鼻式からの系統性と他地域からの影響を読み取る視点が次第に主流となってきたのである。

柿沼は 2006 年には岩鼻式の型式学的整理を行い、岩鼻式の設定と細分（3 期）そして吉ヶ谷式土器への変遷について再考を行う（柿沼 2006)。その中で、吉ヶ谷式の古い段階には、岩鼻式からの系統を追える要素が存在していること、特に、輪積施文甕登場以前に頸胴部に縄文が施される甕（頸胴部帯縄文甕）が存在する点を指摘する。近年では東松山市高坂二番町遺跡や同市八幡遺跡で岩鼻式土器と吉ヶ谷式土器が共伴する事例が報告され、壺・甕が共に櫛描文から縄文へ文様が置き換わっていくという視点で岩鼻式から吉ヶ谷式への変容過程が明らかにされつつある（柿沼 2008b・2010)。

現在では吉ヶ谷式土器は型式的には 1 式と 2 式に分けられ、1 式を 3 期に 2 式を 2 期に区分し、吉ヶ谷系土器を 5 期に区分している（柿沼 2015)。現段階での吉ヶ谷式の位置付けは、岩鼻式から変容して後期中葉頃に出現し、古墳時代前期まで存続する土器型式として概ね理解されている（柿沼 2009・14，柿沼・佐藤・宮島 2008，柿沼・宮島 2010、柿沼 2015・16)。詳細は後述するが、現在の吉ヶ谷式の区分は概要が提示されているのみで具体的な資料操作が提示されていないことに問題が残り、再検討をする余地があると考える。

1-3.吉ヶ谷式土器をめぐる研究の方向性と問題点

ここまで、吉ヶ谷式土器の編年研究を中心にその研究動向と現状の編年観を提示してきた。

現状の編年的位置付けについては前述したようにおおよその変化の流れが確立しつつある。柿沼は近年、吉ヶ谷式土器出現前後の土器の検討を行い（柿沼 2008b・2010)、また横浜市域の北川谷編年（古屋 2013・15）との対比から他地域との併行関係も検討しており（柿沼 2015)、周辺地域との関係を踏まえて吉ヶ谷式の成立から終焉までの変遷や動態を提示している。けれども、柿沼の提示する編年案は 1982 年以降資料操作の過程が明示されていないこともあり、変遷観を読み取るには不明瞭な部分が多い。共伴資料から吉ヶ谷式土器自体の変化の方向性が大きく覆ることはないと考えるが、吉ヶ谷式土器を整理して変遷観やその画期を確認することは、今後の研究において必要不可欠な作業であると考える。

また、外部の影響を受けながら岩鼻式土器から吉ヶ谷式土器への緩やかな型式変化の過程が徐々に明らかになりつつあるが、実際のところは吉ヶ谷式土器の型式としての不明瞭さから岩鼻式から継続する要素、吉ヶ谷式土器における新出の要素など、土器を構成する要素が未整理である点が問題として挙げられる。そのため、吉ヶ谷式の成立の要因や他地域に分布する土器との共通性や差異を見出し難くなっていることが指摘でき、そうした点からも吉ヶ谷式の型式学的検討を改めて行うことが必要となっていると考える。

2. 分析の前提と方法

本稿で分析の対象とする地域は、吉ヶ谷式土器の分布の中心域である比企・入間地域（荒川中流右岸域）を対象とする（第 1 図)。現在の行政区分では埼玉県北西部に位置する地域であり、北は利根川南岸の現在の群馬県境、南は入間川左岸付近にまで展開している。本稿では地形や小河川を基準にして対象地域をＡ～Ｅ群に区分した[(2)]。

吉ヶ谷式土器の編年観は、前述したように、先行研究では甕形土器の型式変遷を基準にし、吉ヶ谷式を 2 式に分け、1 式を 3 期に 2 式を 2 期に区分し（柿沼 2015)、弥生時代後期中葉から古墳時代前期まで存続することは南武蔵南部地域での共伴資料の存在からも概ね共通理解を得ているかと思われる。

基準となる甕形土器の変化によると、1 式の甕形土器は、上半部に輪痕を残し、胴部に刷毛目を残すことを特徴とする。2 式では甕形土器の輪積装飾・胴部の刷毛目を残さないものが主体を占めるようになり、胴部には丁寧にヘラミガキが施される。資料操作の具体的な検証方法が提示されていないため、推察となるが、柿沼は輪積痕の有無、胴下半部の器面調整により、吉ヶ谷式甕の区分の基準を設けている。資料が増加した現在もその変遷観に大きな矛盾はないように思われるが、各属性を整理することでその型式変遷を検証し、吉ヶ谷式土器の変遷を確認してみることとしたい。

吉ヶ谷式土器は、壺形土器・甕形土器・高坏形土器・鉢形土器・甑形土器の器種から成り立ち、どの器種においても基本的には全体的な変化が顕著ではない。その中で比較的変化を捉えられるのは甕形土器であり、吉ヶ谷式土器の変遷観の基準となる器種はその数量の多さからも甕形土器が妥当であると考える。壺形土器などの他の器種からも検討を加えなければならないが、今回は比較的資料も多く検証しやすい甕形土器を対象に行う。

方法としては、まず遺構出土の甕形土器を集成し、各個体の属性を抽出し、それらを並べることで変化の方向性を辿ることにしたい。また、ある程度同時性の保証できる遺構出土の共伴資料を元に、当該地域における吉ヶ谷式甕の変遷を最終的に確認する。

３．甕形土器の分類と変遷

3-1. 分類

本稿では、甕形土器の胴下半部の器面調整、器形、文様施文部位を分類の主要な着眼要素とし、以下の通りに分類を行った。

（１）器面調整

Ａ類：胴下半部の器面調整が刷毛目主体

Ｂ類：胴下半部の器面調整がヘラミガキ主体

（２）器形

1：口縁は緩やかに直立的に立ち上がり、胴部に至る形態

2：頸部が緩く屈曲し、口縁が外反する形態

（３）文様施文部位

a：頸部・頸胴部

b：口頸部

c：胴上半部

3-2. 対象資料の提示

上記分類に基づき、共伴資料として認定しうる対象資料を以下に提示する。

（１）八幡遺跡 6 次 2 号住居跡

八幡遺跡は市ノ川と滑川に挟まれた岩鼻台地上に所在する。2 号住床面から頸部に櫛描波状文の施文された壺形土器 2 点と甕形土器 2 点、頸部に斜縄文が施文された甕形土器 1 点、高坏形土器が 1 点出土している（柿沼・宮島 2010)。

第 2 図 3 は、頸部に縄文を施文する甕形土器で、頸部はゆるやかに括れ、長胴を呈する器形である。A2a 類である。外面は全体を刷毛目調整、口縁部はヨコナデ、頸部には縄文が施文される。第 2 図 4 は 3 に比べると長胴ではないが、口縁部は短く外反し頸部はゆるやかに括れる。頸部には櫛描波状文が 2 段施文され、口縁部にはヨコナデ、口唇端部には刻み目が残される。紙幅の都合で図示できなかったが、同様の櫛描施文甕が 1 点出土している。

（2）船川遺跡第 1 号住・3 号住・4 号住

船川遺跡は、埼玉県東松山市に所在し、比企丘陵東部に位置する（金井塚 1987）。船川遺跡 1 号住、3 号住、4 号住から甕形土器が出土している。1 号住からは壺形土器 2 点、甕形土器 1 点、高坏形土器 1 点が検出している。第 3 図 13 は口唇部に刻み目を残し、口径と胴部最大径の差が少ない器形である。無文であり、外面全面に斜めの刷毛目を残し、口縁部にはヨコナデによって刷毛目が消される。3 号住では甕形土器 1 点、台付と推定される甕形土器 1 点、高坏形土器 1 点が出土している。第 2 図 11 は 1 号住出土の第 3 図 13 のような器形で胴下半部に刷毛目を残す。頸部に結節縄文を施文し、口縁部にヨコナデ痕、口唇端部には刻み目を入れている。4 号住の床面からは口縁部を欠く甕形土器が 1 点出土している（第 3 図 12）。無文であり、外面を刷毛目で調整し、口縁部には輪積痕が 2 段以上残されるものと推定できる。

（3）高坂二番町遺跡 1 次 12 号住

高坂二番町遺跡は、埼玉県東松山市に所在し、高坂台地の北縁に位置している（柿沼・佐藤・宮島 2008）。12 号住のほぼ床面直上から壺形土器 2 点、高坏形土器 1 点、鉢形土器 1 点、甕形土器 20 点が出土している。甕形土器は櫛描施文の個体と縄文施文の個体が共伴している。第 2 図 5 は A1 b 類で頸部は直立的に立ち上がる。口縁部には 4 段の輪積痕を残し、縄文が輪積痕の範囲を超えて施文され、胴下半部に刷毛目痕が明瞭に残る。6 は A2a 類であり、輪積痕は残されず、頸部から胴上半部にかけて縄文が施文される。口縁部にヨコナデ、口唇部には刻みが施される。7 は 6 と同様な様相であるが、器形は 6 程の長胴ではない。8 は A2b 類で口縁部に 5 段の輪積痕が残され、縄文が施文される。口唇部には刻み目が残される。9 は口頸部に 5 段の輪積痕が残り、櫛描波状文が施文される。口唇部に刻み目、口縁部にはヨコナデがなされる。その他に A2a 類の櫛描施文甕も出土しているが、輪積痕を残す個体は 9 以外は現状では確認されていない。10 は無文であり、器面全体に刷毛目調整がなされ、口縁部にヨコナデが施されている。

（4）観音寺遺跡 4 号方形周溝墓

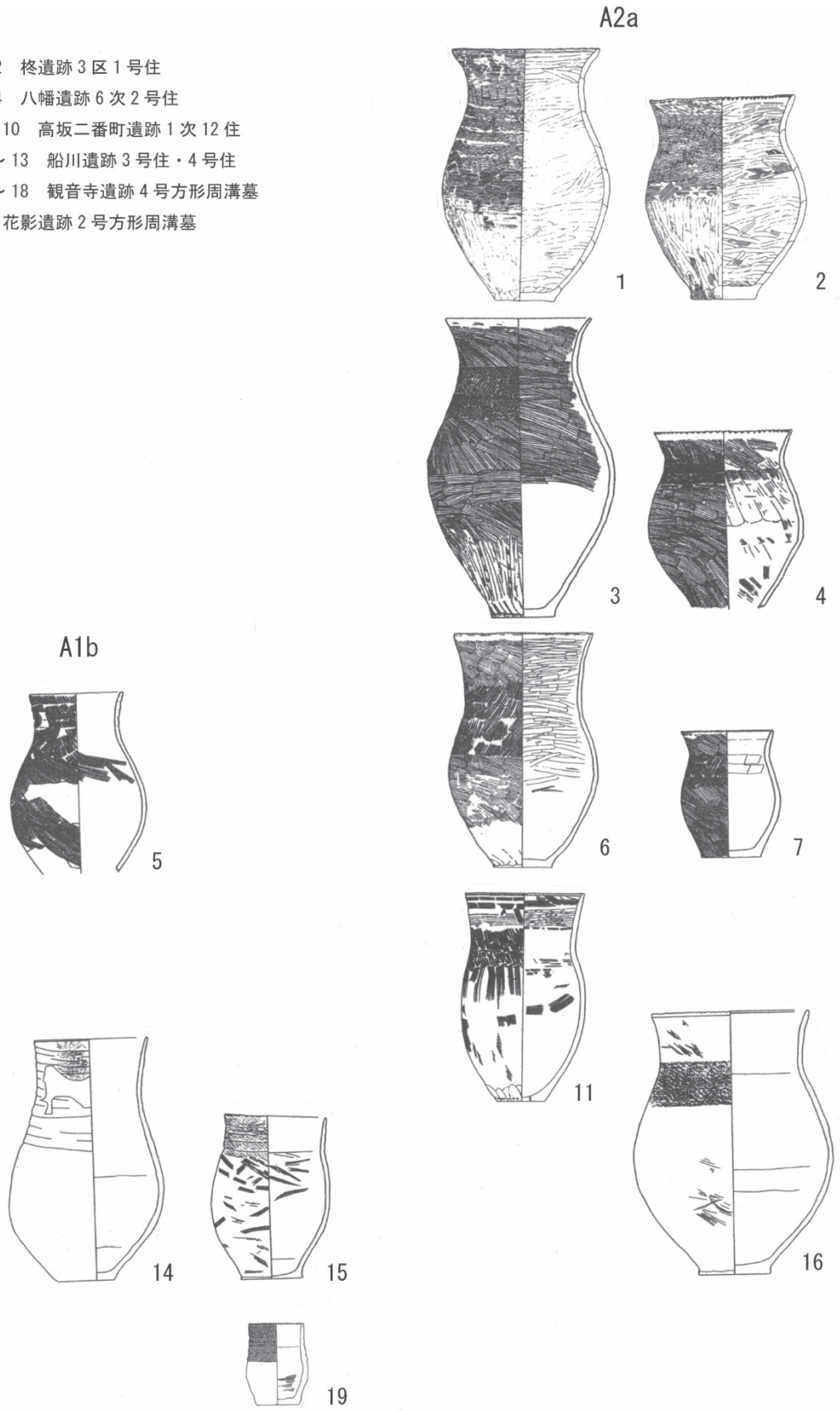
観音寺遺跡は、埼玉県東松山市に所在し、松山台地の北縁に位置している。4 号方形周溝墓の北側周溝から甕形土器 1 点、西側周溝から甕形土器 4 点、壺形土器 2 点が出土している（宮島 1995）。

第 2 図 14・15 は A1 類の甕である。14 は、口縁がわずかに外傾しながら直線的に伸び、頸部で緩く括れ胴部に至る。口頸部から肩部にかけて輪積痕を明瞭に残し、縄文が施文される。器面調整は刷毛目調整と推定されるが全体的に摩滅が激しい。15 は頸部の括れは殆どないが口縁は直立する。輪積痕を明瞭に残し、口頸部に縄文が施される。口唇部には刻み目を残し、胴部は刷毛目調整がなされている。第 3 図 16・17・18 は A2 類である。17 は口縁がわずかに外反しながらゆるやかに胴部へ至る形態で、口径と胴部最大径の差はほとんどない。口唇部に刻み目を残し、口縁部から胴上半部にかけて輪積痕を明瞭に残し、縄文が施文される。18 は 17 に比べると口縁がやや強く外反するが、その他の要素は 17 と同じである。16 は A2 類に位置付けられる形態だが、輪積痕は残されず、頸部に縄文が施文される。口唇部に刻み目を残す。

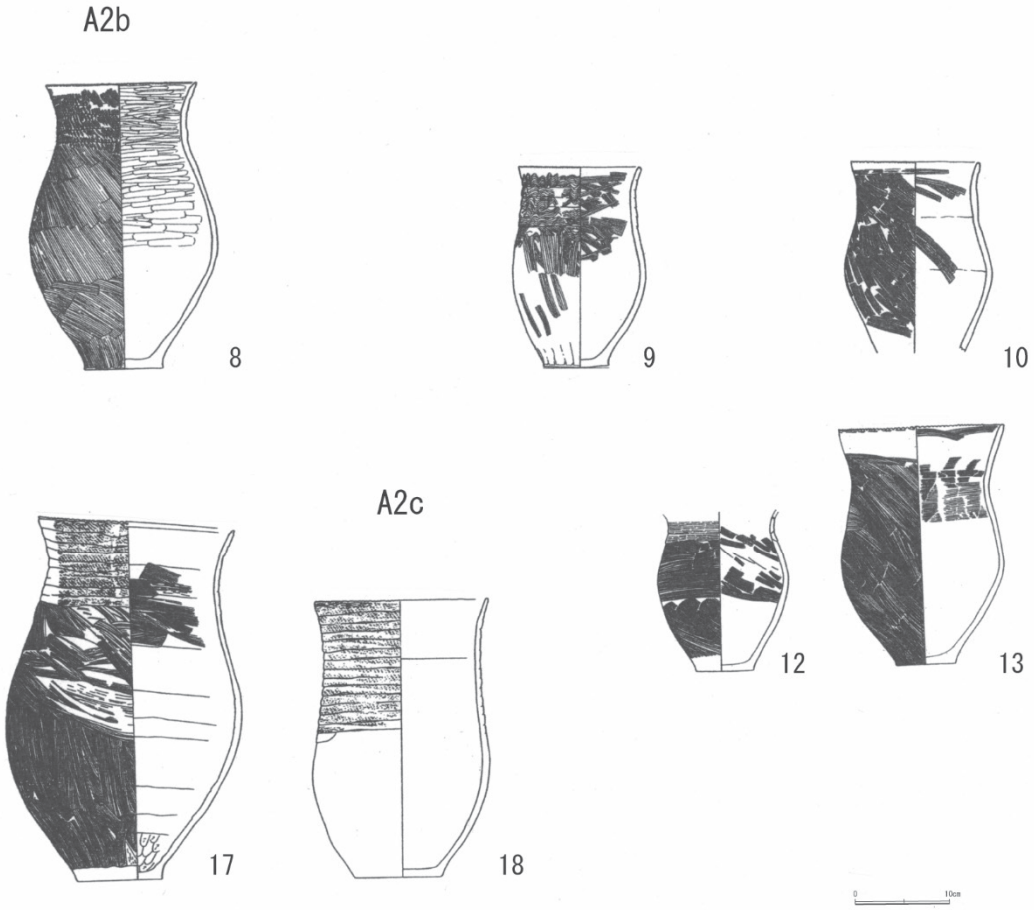
（5）吉ヶ谷遺跡住居址

吉ヶ谷遺跡は埼玉県東松山市に所在し、比企丘陵に所在する吉ヶ谷式土器の標識遺跡である。1 棟の住居跡から土器がまとまって出土している。吉ヶ谷遺跡の資料は金井塚良一によって報告がなされ（金井塚 1965）、その後柿沼幹夫が再実測をして報告をしている（柿沼 2008）。壺形土器 5 点、甕形土器 9 点、高坏形土器 2 点、鉢形土器 2 点、甑形土器と推定される底部片が 1 点出土している。甕形土器はＡ類とＢ類が共伴している。第 4 図 1 はＡ2c 類で口径部と胴部最大径の差が小さい器形である。胴下半部には刷毛目痕、胴上半部には輪積痕を残して縄文が施文される。口唇部には縄文が施文されている。第 4 図 2 は B2 c 類で胴下半部が刷毛目調整後へラミガキがなされている。口唇部には刻み目、胴上半部に縄文施文、口縁部に指でヨコナデがなされている。3 は口唇部縄文施文、胴上半部に施文される縄文原体は複節である。

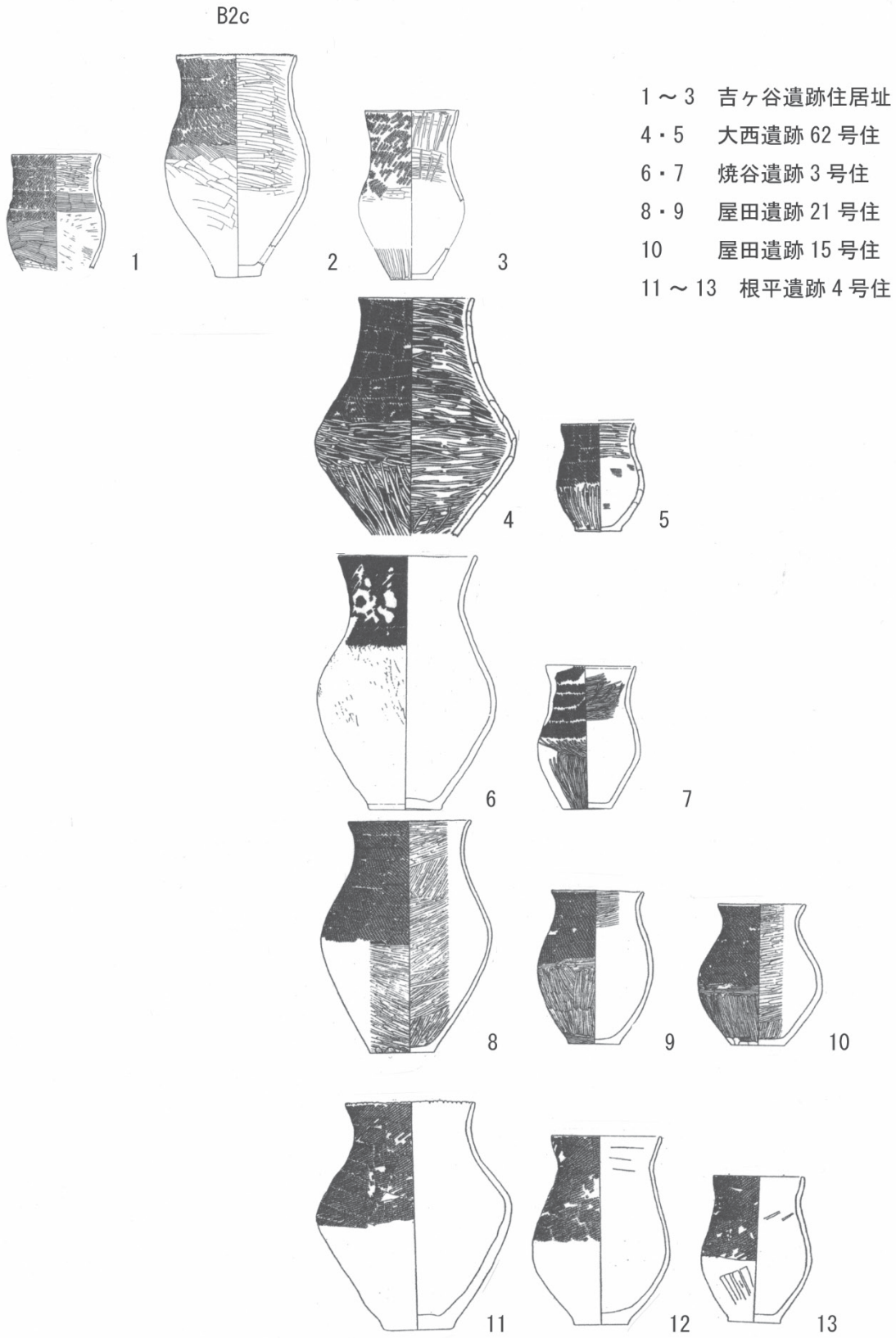
1・2　柊遺跡３区１号住
3・4　八幡遺跡６次２号住
5～10　高坂二番町遺跡１次12住
11～13　船川遺跡３号住・４号住
14～18　観音寺遺跡４号方形周溝墓
19　花影遺跡２号方形周溝墓



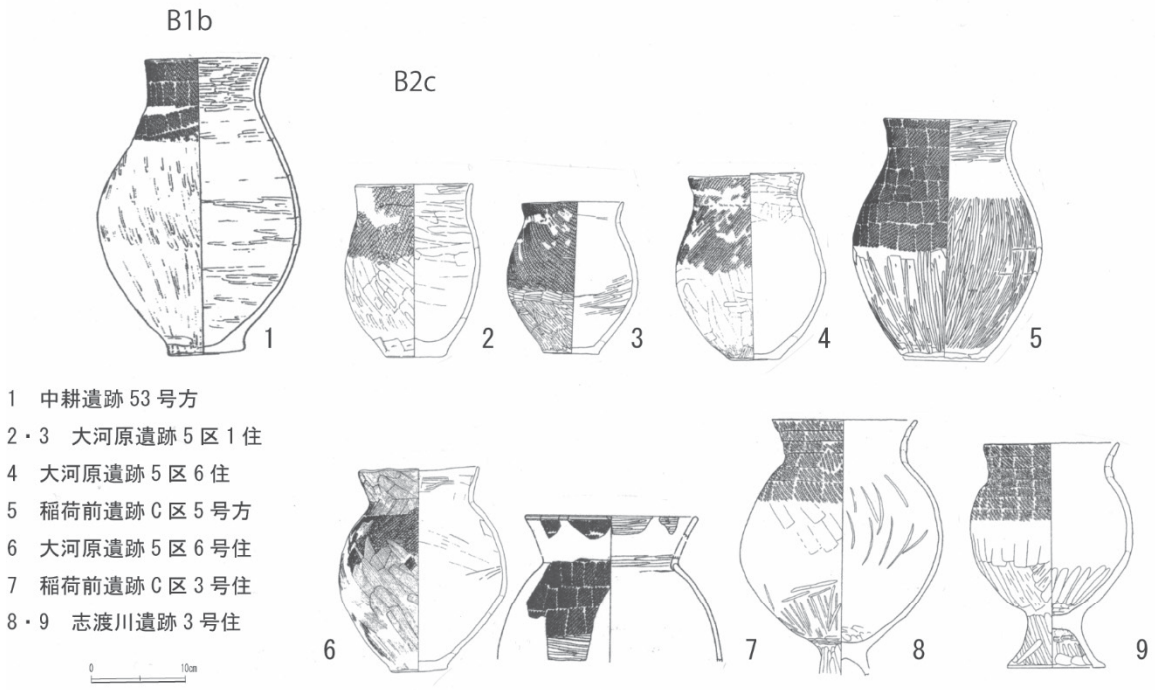
第２図　甕Ａ類（１）（図版は各報告書より引用）



第３図　甕Ａ類（２）（図版は各報告書より引用）

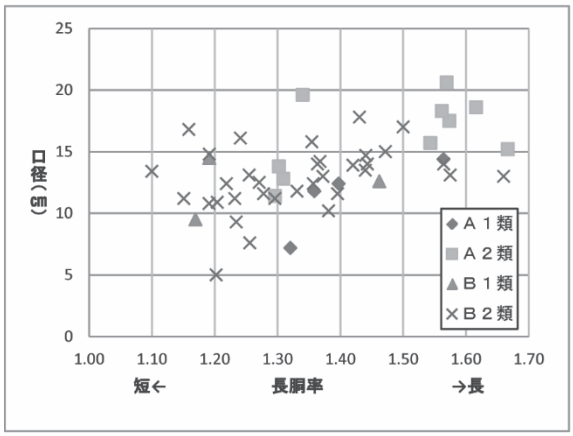


第４図　甕Ｂ類（１）（図版は各報告書より引用）

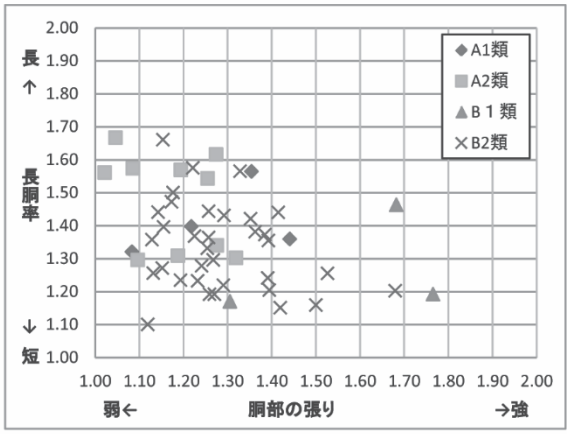


第 5 図　甕 B 類（2）

（図版は各報告書より引用）



第 6 図　甕の大きさと長胴率の関係



第 7 図　長胴率と胴部の張りの関係

（6）大西遺跡第 62 号住

大西遺跡は埼玉県東松山市にあり、高坂台地のほぼ中央からやや南寄りに位置する（鈴木 1991）。第 62 号住の南西主柱穴と壁面との間部分から壺形土器 8 点、台付甕形土器 1 点、甕形土器 7 点、高坏形土器 3 点が出土している。第 4 図 4 は B2c 類で、胴部中央に張りを持つ。口唇部と胴上半部に斜縄文を施しており、胴下半部には刷毛目調整の後にヘラミガキがなされている。第 4 図 5 は口縁部は緩やかに外反して開く形態である。胴上半部に縄文を施文し、口唇部に刻み目を施している。

（7）焼谷遺跡第 3 号住

焼谷遺跡は、埼玉県深谷市に所在する。地形的には江南台地北辺に位置し、標高 70m 前後の斜面上に立地している（村松 1991）。3 号住の床面から壺形土器 4 点、甕形土器 3 点、鉢形土器 2 点が出土している。甕形土器はいずれも B2c 類である。第 4 図 6 は胴部上半部に最大径があり、張り出しが強い形態である。口唇部と胴上半部に縄文を施文し、胴下半部は縦方向にヘラミガキがなされる。

（8）屋田遺跡第 15 号住・第 21 号住

屋田遺跡は比企郡嵐山町に所在し、市の川右岸の台地上に位置する（今井 1984）。第 15 号住の南コーナーの床面上から甕形土器の上半部片 4 点、高坏形土器 1 点、鉢形土器 1 点検出されており、炉跡内から完形の甕形土器が出土している（第 4 図 10）。10 は B2 c 類であるが、胴部中位に最大径があり、張り出しが強く、長胴率も 1.26 となる。第 21 号住は炉跡内から倒れた状態で甕形土器 2 点（第 4 図 8・9）と無頸壺が出土している。いずれも B2c 類で口唇部と胴上半部に縄文を施文する。

（9）根平遺跡 4 号住

根平遺跡は、埼玉県東松山市に所在する。岩殿丘陵の南東尾根上の開けた狭い平坦部に位置する（水村 1980）。4 号住の南東コーナーの床面直上より、甕形土器 6 点、台付甕形土器 1 点、壺形土器 1 点、器台形土器 1 点、高坏形土器 1 点、椀形土器 2 点が出土している。「五領式」期の土器が共伴しており、縄文施文の甕は第 4 図 11・12・13 の 3 点と台付甕と推定される甕 1 点である。いずれも B 2c 類であるが、11 は胴部が強く張りだす形態である。胴下半部はヘラミガキ調整、口唇部は刻み目が全周する。12・13 の口唇部は無文である。その他に口唇部に縄文を施文する個体も出土している。

（10）中耕遺跡第 42 号方形周溝墓

中耕遺跡は埼玉県坂戸市に所在し、越辺川右岸の自然堤防上に位置している（杉崎 1994）。第 42 号方形周溝墓の北西コーナーより縄文を施文した甕形土器が 1 点出土している（第 5 図 1）。報告書では「広口壺」と表記がされているが、器形や文様施文のあり方から甕形土器と判断した。口唇部と口頸部に縄文が施文される B1b 類である。

（11）大河原遺跡 5 区 1 号住・6 号住

大河原遺跡は埼玉県坂戸市、葛川左岸の毛呂台地上に位置する（藤野 2012a・b）。5 区 1 号住の南西壁の床面から縄文施文の甕形土器が 3 点、土師器高坏、台付甕が出土している。いずれも B2c 類である。5 区 6 号住の北東壁付近から甕形土器 2 点と土師器の有稜高坏が出土している。第 5 図 6 は胴上半部に縄文施文した後に刷毛調整を行っており、頸部が「く」の字状に明瞭に屈曲する。

（12）稲荷前遺跡 C 区 5 号方形周溝墓

稲荷前遺跡は埼玉県坂戸市に所在し、越辺川を臨む毛呂台地の北東部先端の低台地上に位置する（村田・富田 1994）。C 区 5 号方形周溝墓南溝覆土下層より縄文を施文した甕形土器が 1 点出土している（第 5 図 5）。器壁が剥離しているため不明瞭ではあるが、胴上半部に縄文が施文されている。C 区第 3 号住の覆土からは「く」の字状に強く頸部が屈曲した縄文施文の甕形土器が 1 点出土している（第 5 図 7）。

3-3. 型式組列の検討

対象資料を概観し、資料に基づいて分類した表が第 1 表・第 2 表となる（第 2〜5 図）。ここでは器面調整、器形、文様施文部位、口唇部文様、輪積痕の属性ごとにその変化を確認していきたい。

（1）胴下半部の器面調整

器面調整は、甕の内面は丁寧に磨かれるが、胴下半部外面の器面調整が刷毛目調整主体となる A 類とヘラミガキが主体となる B 類が存在する。甕の器面に刷毛目を明瞭に残す点は弥生時代中期後半からみられる比企・入

間地域の甕の特徴である（松本 2003）。第 1 表に追加して、甕の共伴関係を示したものが第 2 表になり、刷毛目調整（A 類）からヘラミガキ調整（B 類）へと変遷することが読み取れる。また、口縁部にヨコナデが明瞭に残り、口縁部に無文部位を作り出している点は A 類甕の特徴として挙げられ、岩鼻式甕と共通する要素でもあることが読み取れる。

（２）文様施文部位

文様は基本的には口頸部、頸部・頸胴部、胴上半部に施文される。文様原体が櫛描文か縄文かで異なるものの、A2a 類の出土状況からみると、共伴資料から岩鼻式甕からの連続性をもつことが確認でき、口頸部・胴上半部施文の個体よりも岩鼻式甕との関係性が強いことがうかがい知れる。その後、口頸部、胴上半部に文様施文される個体が確認できるようになると、B2c 類が主流となる。B2c 類は例外はあるものの胴部最大径付近まで縄文を施文するものが大半であり、輪積痕を残す個体には輪積痕に沿って丁寧に施文され、次第に輪積痕が形骸化するようになると、文様施文も丁寧さが失われる傾向にある [(3)]。

（３）器形

器形は胴上半部の形状から大きく 2 つに分類でき、それぞれ長胴率や胴部形態の変化が認められる。

1 類は口縁は緩やかに直立的に立ち上がる形態で、まっすぐに伸びる口頸部に文様が施文される。この元々の器形の特徴から、頸部に文様が施文されるものは A1 類にはなく、口頸部（A１b 類）と胴上半部（A１c 類）施文のみとなる。また、１類は櫛描文の原体をもつ個体は現状では確認されておらず、高坂二番町遺跡 1 次 12 住（第 2 図 5）では岩鼻式甕と共伴して出土することから、吉ヶ谷式期になり出現した甕の形態の可能性がある。2 類は頸部が緩く屈曲し、口縁が外反する形態で、岩鼻式甕から継続する形態である。文様施文部位も岩鼻式甕と同様に頸部に施文するａ類が岩鼻式と共伴して出土する [(4)]。B類出現以後は頸部に文様施文をするａ類は消失する傾向にある。

続いて、甕の大きさ [(5)]、長胴率、胴部の張りの変遷について可能な限り数値化をし、より具体的な器形の検討を行ってみたい。

まず、長胴率を計測できる 51 個を対象に長胴率と大きさの関係を検討する（第 6 図）。長胴率は、器高を 1 とした時の胴部最大径の比率を求めることで、算出している。数字が大きければ胴長、小さければ横長の形態を示す。１に近ければ正方形により近い形態である。第 6 図ではＡ類は、長胴率が 1.50 以上で口径が 15 ㎝以上の比較的大型で長胴なものと、長胴率 1.30 台の中型のものの 2 つのまとまりが確認でき、長胴率 1.25 以下のものは現状では検出されていない。B 類になるとＡ類で認められた大型で長胴のものが大幅に減少し、長胴率は 1.30 以下のものが増え、1.10～1.50 台の範囲内におおよそ収まる傾向にある。口径も 10～15 ㎝内のものが中心となり、Ａ類から比べると小型化が進むようである。

続いて胴部の張りの変遷について長胴率との関係をみながら検討する（第 7 図）。胴部の張りについては、口径より張り出す形態とそうでない形態が存在することから、胴部最大径/口径によって出された数値を算出した。数値が大きくなるほど胴部の張り出しが強いことを示している。A 類は B 類と比べると胴部の張り出しが弱めであり、A2 類は最大で 1.34 となり、それ以上に胴部が張ることはない。A1 類は口頸部形態の特徴から元々胴部に丸味をおびているものが多く、A2 類よりも当初より張り出しは強い傾向にある（第 2 図 5・14 等）。また、B 類が出現するとこれまでの胴部形態の他に、1.30 以上のものが増え胴部の張りが強くなっていくことが窺える（第 4 図 4・6・8・11 等）。ただし、数は少ないものの 1.30 以下のあまり胴部の張らない形態も一定数残るようである。

最後に長胴率と胴部の張りの関係をみてみると、長胴であまり胴部の張らない器形から長胴率の比率が小さく胴部の張り出しが強くなるものへまとまっていくことがうかがい知れる。

以上、器形を形態、長胴率、胴部の張り、大きさから検討を行い、それぞれの変化を確認した。器面調整の変化とこうした器形の変化も連動していることが読み取れ、A 類から B 類への変化が吉ヶ谷式甕の画期として認識できる。

（４）口唇部文様

口唇部に工具で刻み目を残すものや縄文を施文するなどして口唇部に文様施文がなされることも吉ヶ谷式甕の特徴であることから口唇部文様についても確認してみたい。A 類には口唇部に刻み目を残すものが多く、B 類では口唇部に縄文施文される比率が高まる傾向にある。口唇部が無文である個体も A 類・B 類共に存在しているが、大河原遺跡 5 区 1 住・6 住や稲荷前遺跡 C 区 5 号方などの土師器が共伴する B 類には口唇部が無文で

ある個体が主流となることが読み取れる。口唇部の文様の変化は胴下半部器面調整との関連が強く、刷毛目調整からヘラミガキへ変化する時期に口唇部に刻み目を残す甕が減少する傾向にあり、甕の製作と関連しているものと想定できる。

（５）輪積痕

輪積痕はＡ類･Ｂ類の両方から確認できる要素であるが､第１表からＡ類との関連が強いことが読み取れる。5 段以上の輪積痕を残すＡ類の甕が吉ヶ谷式甕の主流となっていくが、Ｂ類が主流となる頃には輪積痕は残されないものが一般的となる。

輪積痕を残す個体は岩鼻式土器が主体となる時期には現在までのところ確認されていないが、高坂二番町遺跡では櫛描波状文を施文した岩鼻式甕（第 2 図 9）と縄文施文の吉ヶ谷式甕（第 2 図 5・8）に輪積痕が残される事例が認められる。船川遺跡 4 住では無文刷毛調整甕に輪積痕が残される個体があり（第 3 図 12)、縄文施文の甕形土器以外にも輪積痕を残すことが読み取れる。しかし、頸部・頸胴部に文様施文がされる個体からは輪積痕を残すものは確認できず、文様施文のあり方と関連する要素であることがうかがい知れる。

3-4. 甕の型式変遷の画期

各属性にみる甕の変遷とその共伴関係から吉ヶ谷式甕の変遷を確認してきた。これまで先行研究で提示してきた変遷観と大きな相違はないように思われるが、吉ヶ谷式甕の変化は下記の３点に集約できる。

① 刷毛目調整＋口唇部に刻み目＋輪積痕を残す（頸部・頸胴部縄文施文甕では輪積を残さない）

② ヘラミガキ調整。輪積痕を残すものが減少し、基本的には輪積痕を残さなくなる。口唇部に縄文施文される甕の出現。

③ ヘラミガキ調整。口唇部が無文化

器形、器面調整、口唇部文様の変化から、本稿では①と②の間に吉ヶ谷式甕の画期があると判断し、吉ヶ谷式甕は二大別できるものと理解する。柿沼編年との対応関係については第 2 表の通りとなる [6]。

柿沼が甕の変遷の画期として想定していると思われる輪積痕については､岩鼻式から継続する要素ではない。前述したように、高坂二番町遺跡 1 次 12 号住例以前には当該地域には輪積痕を残す甕は現状では存在せず、縄文施文の甕形土器以外にも輪積痕が明瞭に残されることから吉ヶ谷式固有の要素ではないことがうかがい知れる。柿沼は甕の輪積痕の出現を東京湾岸系の影響と想定しているが、当該地域の様相から一方向的な影響により生じたものとも捉えにくい。また甕の画期の要素として、輪積痕の消失を挙げているが、輪積痕の存続時期も短く、緩やかに消失していく様相が確認できるため、輪積痕の有無をもって甕の変化の線引きをすることは容易ではない。こうしたことから、一地域内の検討では甕に残される輪積痕については論述することが難しく、輪積痕を残す甕については他地域の甕との更なる検討を要するものと考える。

４．弥生時代後期の比企・入間地域の甕形土器の変遷

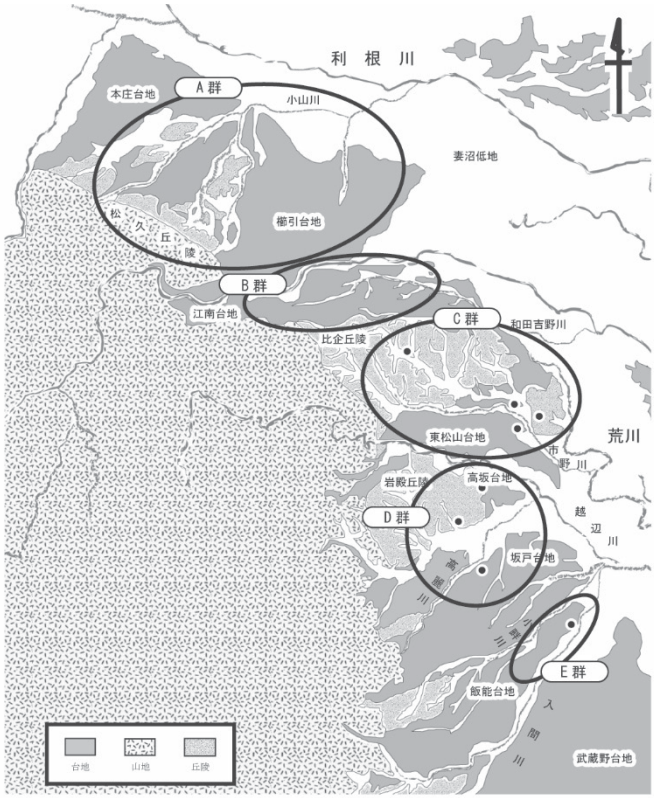
最後に、甕の変遷に見られる吉ヶ谷式土器を主体とする遺跡の時空間的変遷を概観し、弥生時代後期の比企・入間地域の大まかな変化を捉え、今後の検討視点を述べることとしたい。

なお、時期区分については吉ヶ谷式甕の変遷観を元に、便宜的に出現期・拡大期・終焉期の三時期に区分した。

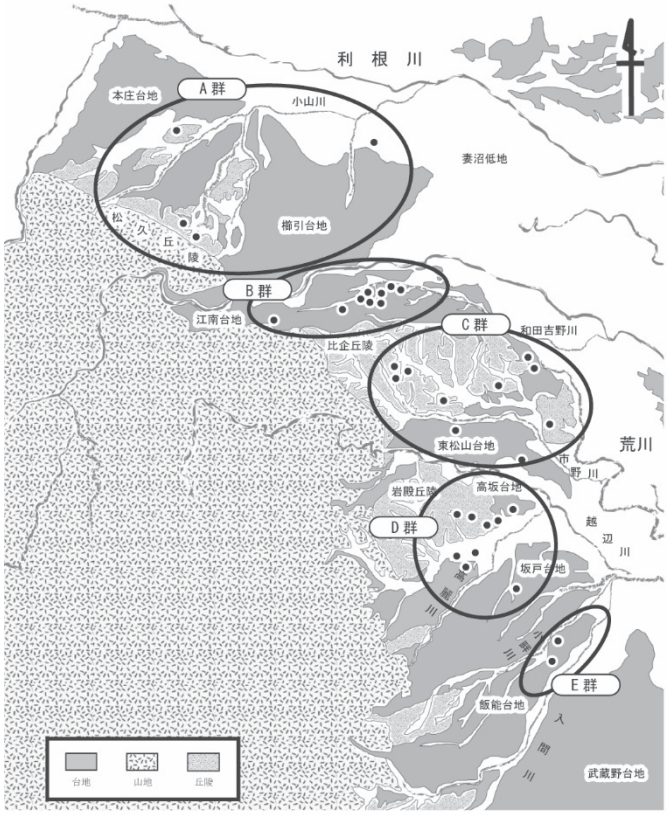
（１）出現期（北川谷 3 期併行）

胴下半部の刷毛目調整、口唇部の刻目施文等、岩鼻式土器からの連続性を持つことが特徴的な甕が主体となる時期である。柿沼の吉ヶ谷１式期に相当する。

器形 [7] や器面調整などの技術的な側面は地域的な伝統を保持している。一方でこの時期において型式を超えて出現する輪積痕は、吉ヶ谷式独自の特徴として語れる要素ではなく、より広い地域との関係性から考えていく必要がある要素ではないかと考える。また、頸部・頸胴部縄文施文甕には輪積痕は残されないことが特徴的であり、こうした土器が近年比企・入間地域のみならず佐久盆地から南武蔵南西部までの幅広い地域で検出されていることも指摘されていることから（小山 2015、柿沼 2016)、本稿では吉ヶ谷式土器の成立要因について詳述できないものの頸部･頸胴部縄文施文甕の分析 [8] が今後吉ヶ谷式土器成立に関する研究を深化させるものと考える。



a. 出現期の遺跡分布図



b. 拡大期・終焉期の遺跡分布図

第８図　吉ヶ谷式土器を主体とする遺跡の分布（時期別）

この時期の遺跡の分布を見ると、C群・D群を中心に吉ヶ谷式土器が出現することがわかる（第8図a）。八幡遺跡6次2住（柿沼・宮島2010）や高坂二番町遺跡1次12号住（柿沼・佐藤・宮島2008）の事例では、岩鼻式土器と共伴し、岩鼻式と吉ヶ谷式が同時併存しながら文様原体の置換により緩やかに移行していくことが窺え、C群・D群を中心に吉ヶ谷式土器が広まっていく様相が伺い知れる。出現期の吉ヶ谷式土器の南限は坂戸台地付近[9]までと読み取れる。

一方でこの時期には比企・入間地域以外で頸部・頸胴部縄文施文甕以外の吉ヶ谷式土器の検出事例は顕著ではなく、ほとんど当該地域以外で確認されていないことも特筆できよう。

（2）拡大期（北川谷4〜5期併行）

この時期の吉ヶ谷式甕は胴上半部に輪積痕を残さないものが主体となり、胴下半部には丁寧にヘラミガキが施される。これまでの刷毛目調整の伝統から大きく変化したことが読み取れる。柿沼編年の吉ヶ谷2式期〜吉ヶ谷系期に相当する。比企・入間地域での吉ヶ谷式を主体とする遺跡数の増大が確認でき、量的、空間的に大きな広がりを見せる時期である。これまで主体としていたC群・D群から北にある江南台地への進出が著しく、南部のE群へも進出が認められる（第8図b）。

また一方でこの時期には比企・入間地域以外にも吉ヶ谷式土器が検出される事例が増加する。樽式土器分布の南縁部である神流川流域（埼玉県本庄市）や鏑川流域（群馬県甘楽郡・富岡市）では、吉ヶ谷式土器が検出されるだけでなく、樽3期に相当する樽式土器との共伴事例や折衷土器が見受けられる（恋河内1991，大木1997，深澤1999・2000）。荒川流域の対岸にあたる大宮台地上（笹森1990）、多摩丘陵での朝光寺原式土器との共伴事例や武蔵野台地上を中心とした東京都内での事例が報告されており（浜田・宮川2003）、各地で器種組成の一部を構成するような形で広まりだすのである。東京湾西岸域の編年と対比すると北川谷4期以降に相当する時期と推定され、吉ヶ谷式土器は各地に広がるが、分布の中心域では他地域の土器との共伴事例が稀少であることが特筆される。

北川谷5期（古）併行期になると、器種組成に南武蔵北部地域に特徴的な刷毛目調整台付甕などが検出され、徐々に吉ヶ谷式土器の比率が減少していく傾向にあるが、吉ヶ谷式甕の諸要素の大きな変化は見られない。

（3）終焉期（北川谷6期併行）

この時期の甕形土器の特徴としては、口縁部から胴上半部にかけて縄文を施文し胴下半部成形にヘラミガキを施す等、これまでの吉ヶ谷式甕の要素の継続を確認できる一方で口唇部は無文化する傾向にある。また、頸部が「く」の字状に屈曲する甕（第5図6・7）や輪積痕が明瞭に残り縄文が施文される台付甕（第5図8・9）が出現し、土師器甕に影響を受けたと想定されるような器形が出現する。

北川谷6期・柿沼編年の吉ヶ谷系期に相当する時期であり、器種組成の大半を吉ヶ谷式土器以外の非在地系土器が占めるようになり、集落域からの出土も徐々に減少する傾向にある。樽式・二軒屋式・十王台式土器分布域にも広がることが近年指摘されており（藤野2012a・b）、この時期の甕形土器についてはより広域的な資料集成と細分や分類によって、より詳細に検討することができよう。

以上、甕の変遷を元に便宜的に三時期に区分し、各時期における甕の様相と比企・入間地域の遺跡の変遷を確認しながら、今後の課題等も述べてきた。

甕形土器の画期に同調して、吉ヶ谷式土器が拡散することが読み取れる。こうした現象の背景については本稿では詳述することができないが、丘陵地を中心に占地する吉ヶ谷式期の集落は自然環境に応じた食糧生産活動や生業形態が存在し、南関東地方の弥生時代集落と同一視することは難しく、今後土器以外の出土遺物や遺構などからも検討を加えることで、考察を深めていきたいと考えている。

おわりに

本稿では、比企・入間地域の吉ヶ谷式甕を対象にその型式変化の検証を行い、その変遷を各属性をもとに整理を行った。その結果、従来の変遷観と大きく変わることはなかったものの、これまでの研究で不明瞭であった甕形土器の型式変化を明示し、その変遷観と画期を提示することで当該地域における検討のための基盤を確認することができた。

今回甕形土器のみの検討であったため、吉ヶ谷式土器の編年的位置付けとしてはあくまで仮のものである。

本稿での検討は大枠を捉えたに過ぎず、土器の観察視点や検討方法など不十分な点が多い。より細分も可能であることから、方法の整備や土器に対する着眼視点の精緻化を進め、今後壺形土器や高坏形土器などの変遷も踏まえて再検討すべきものと考えている。

【註】

（1）吉ヶ谷式土器研究初期段階では、帯状に縄文を施文する特徴や壺形土器に耳状の貼り付け文を持つ特徴から吉ヶ谷式土器の成立を宮ノ台式土器に求める考えが主流を占めていた（柿沼 1982、泉谷 1982）。その一方で口縁から胴部上半にかけて縄文の施された池上甕 4 類（熊谷市池上遺跡出土）を祖形とする考えも存在し、当時岩鼻式土器との併行関係にあるなかで吉ヶ谷式土器の系譜をたどる研究が行われていた（中島 1984、小出 1997）。その後、熊谷市北島遺跡の調査で池上甕 4 類の系統が池上→小敷田→上敷免（新）→北島式へと、妻沼低地周辺部で弥生時代中期中葉から中期後半まで継続することが指摘されるようになるが（吉田 2003）、中期末から後期前半の空白が埋められない問題もあり、現在も池上甕からの流れでは吉ヶ谷式土器との結びつきが捉え難い現状にある。

（2）各地域区分の詳細は筆者前稿に譲る（内藤 2012）。

（3）輪積痕に沿って縄文を施文するものと輪積痕の残る部位から大きく超えて施文されるものが存在し、文様の施文方法のあり方についても分類する可能性が指摘されている（宅間 2006、柿沼・佐藤・宮島 2008）。

（4）柿沼が指摘するように、頸胴部縄文施文甕には大型と小型のものが 2 つ存在している（柿沼 2016）。

（5）甕形土器の大きさは、残存率の高い口径部の大きさで便宜的に数値化している。

（6）本稿では甕の変遷を元に様式に基づいた柿沼編年との対比を行ったのみであり、吉ヶ谷式の編年観については甕以外の器種組成も踏まえ、再検討をしなければならないと考えている。

（7）頸部の立ち上がりが緩やかな長胴形を呈する吉ヶ谷式甕の古相の器形は岩鼻式 2 期までしか遡れず、その系譜が注目されている（佐藤 2012）。

（8）頸部・頚胴部縄文施文甕の位置付けについては、その消長から荒川中流右岸域を発生源とする案（柿沼 2016）、朝光寺原式土器の分布域にあたる多摩丘陵を想定する案（佐藤 2012）、「長尾台北式」（浜田・宮川 2003）として提唱する案など、どこに系譜が辿れるのかという点と既存の土器型式の範疇で捉えるのか、または吉ヶ谷式土器の範疇におさめて検討するのかといった点も争点となっている。本稿では吉ヶ谷式土器の一種として本稿では検討したが、今後各地域の類例の検討や消長によって別型式として認識できる可能性も考えておきたい。

（9）川越市霞が関遺跡が宮ノ台式期より継続して存続していることが報告されているが、正式報告がなされていないため、その詳細は不明である。

参考文献

石岡憲雄　1982　「『吉ヶ谷式』と『岩鼻式』土器について」『研究紀要』第 4 号　埼玉県立歴史資料館

泉谷俊憲　1982　「南関東弥生時代における吉ヶ谷式土器についての一考察」『法政史論』第 9 号　法政大学大学院日本史学法政史論会

大村　直　2004　「久ヶ原式・山田橋式の構成原理」『史館』第 33 号　史館同人

大村　直　2007　「山田橋式補遺」『西相模考古』第 16 号　西相模考古学研究会

大村　直　2009　「久ヶ原式と山田橋式」『南関東の弥生土器 2』六一書房

大木紳一郎　1997　『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 217 集

柿沼幹夫　1982　「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第 5 号　土曜考古学研究会

柿沼幹夫　1994　「吉ヶ谷式土器を出土する方形周溝墓」『検証！関東の弥生文化』埼玉県立博物館

柿沼幹夫　1996　「方形周溝墓出土の土器（埼玉県）」『関東の方形周溝墓』同成社

柿沼幹夫　2008　「吉ヶ谷遺跡出土土器について（補論）」『埼玉の弥生時代』六一書房

柿沼幹夫　2009　「北武蔵中央部の後期土器」『南関東の弥生土器 2－後期土器を考える－』六一書房

柿沼幹夫　2014　「前中西遺跡の周辺をめぐる課題」『熊谷市前中西遺跡を語る－弥生時代の大規模集落』六一書房

柿沼幹夫　2015　「吉ヶ谷式・吉ヶ谷系土器の移動」『ゆくものくるもの』かみつけの里博物館

柿沼幹夫　2016　「頸胴部帯縄文甕-交差編年・地域間交流の鍵-」『埼玉考古』第 51 号　埼玉考古学会

柿沼幹夫・佐藤幸恵・宮島秀夫　2008　「岩鼻式土器から吉ヶ谷式土器へ－東松山市高坂二番町遺跡第１次第 12 号住居跡出土土器をもとに－」『国士舘考古学』第４号　国士舘考古学会
柿沼幹夫･宮島秀夫　2010　「岩鼻式土器から吉ヶ谷式土器へその 2－東松山市八幡遺跡 6 次 2 号住居跡出土土器をもとに－」『埼玉考古』第 45 号　埼玉考古学会
金井塚良一　1965　「埼玉県東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」『台地研究』16　台地研究会
恋河内昭彦　1991　『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第 14 集　児玉町教育委員会
小出輝雄　1997　「宮ノ台式土器の周辺―吉ヶ谷土器を中心として（序論）－」『人間・遺跡・遺物―わが考古学論集 3－』文献出版
小林行雄・杉原荘介　1968　『弥生式土器集成』本編　東京堂出版
小山岳夫　2015　「長野県各地の後期弥生社会と隣接地域間交流」『ゆくものくるもの』かみつけの里博物館
笹森紀己子　1990　「大宮市内出土の外来系土器について」『研究紀要』第２号　大宮市立博物館
佐藤康二　1997　「吉ヶ谷式の高坏について―弥生時代後期土器の一様相―」『人間・遺跡・遺物―わが考古学論集３－』文献出版
佐藤康二　2012「吉ヶ谷式土器成立に関する覚書」『考古学論攷』Ⅰ　千葉大学文学部考古学研究室
滝沢亮　1985　「第Ⅵ章　結語」『釜台町上星川遺跡』相武考古学研究所
宅間清公　2006　「Ⅴ調査のまとめ　1. 吉ヶ谷式土器をめぐる問題」『杉の木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 323 集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
中島　宏　1984　『池守・池上』埼玉県教育委員会
浜田晋介・宮川和也　2003　「吉ヶ谷式土器の拡散と変容－東京都・神奈川県内の集成－」『埼玉考古』第 38 号　埼玉考古学会
内藤千紗　2012　「弥生時代後期の竪穴建物の変化と画期－吉ヶ谷式土器分布圏を対象として－」『法政考古学』第 38 号　法政考古学会
内藤千紗　2015　「吉ヶ谷式土器研究に対する展望と課題」『列島東部における弥生後期の変革―久ヶ原・弥生町期の現在と未来－』六一書房
深澤敦仁　1999　「「赤井戸式」土器の行方」『群馬考古学手帳』vol.9　群馬土器観会
深澤敦仁　2000　「群馬県出土の「赤井戸式」土器について」『東日本弥生時代の後期土器編年』第１分冊　東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
藤野一之　2012a　『大河原遺跡 2』坂戸市教育委員会
藤野一之　2012b　「吉ヶ谷式系土器の終焉に関する一考察」『駒澤考古』37　駒澤大学考古学研究室
古屋紀之　2013　「横浜市都筑区北川谷遺跡群における弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年」『横浜市歴史博物館』第 17 号　横浜市歴史博物館
古屋紀之　2015　「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域圏とその動態」『列島東部における弥生後期の変革―久ヶ原・弥生町期の現在と未来－』六一書房
松本　完　2003　「後期弥生土器形成過程の一様相－埼玉県中央・北西部の事例から－」『埼玉考古』第 38 号　埼玉考古学会
吉田　稔　2003　『北島遺跡Ⅵ』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 286 集
【発掘調査報告書】
新井　端　1983　『姥ヶ沢遺跡Ⅰ』江南村文化財調査報告第４集　埼玉県大里郡江南村教育委員会
石塚三夫　1996　『伊勢原遺跡』寄居町遺跡調査会報告第６集　寄居町遺跡調査会
磯崎　一　1989　『新田浦・明戸東・原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 85 集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
礒崎　一　1992　『白草遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 118 集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
今井　宏　1984　『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告ⅩⅧ－屋田・寺田台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 32 集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
金井塚良一　1973　『大谷遺跡』滑川村教育委員会
金井塚良一・高柳　茂　1987　『船川遺跡』船川遺跡調査会
金子直行　1993　『四反歩遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 130 集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
川口　潤　1992　『蟹沢・芳沼入・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 119 集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

黒坂禎二　1989　『上組Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 80 集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
栗原文蔵　1974　『駒堀』埼玉県遺跡調査会報告第４集　埼玉県遺跡調査会
小久保徹ほか　1976　『鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書第８集
小林　茂・柿沼幹夫・鈴木秀雄　1989　「川本町万願寺出土の遺物」『埼玉考古』第 25 号　埼玉考古学会
小林　高　1999　『町内遺跡 7』寄居町文化財調査報告書第２１集　寄居町教育委員会
小林　高　2002　『町内遺跡 9』寄居町文化財調査報告書第２４集　寄居町教育委員会
小林　高　2003　『伊勢原遺跡（第３次）』寄居町遺跡調査会報告第 23 集　寄居町遺跡調査会
小林　高　2003　「寄居町伊勢原遺跡の古墳出現期集落」『埼玉考古』第 38 号　埼玉考古学会
佐藤康二　1994　『大野田西遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 138 集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
杉崎茂樹　1993　『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 125 集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鈴木孝之　1991　『代正寺・大西』㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 110 集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
高崎光司　1990　『玉大岡遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第９０集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
谷井　彪　1974『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ―南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影―』埼玉県遺跡発掘調査報告書第３集
利根川章彦　1991　『竹之花・下大塚・円阿弥遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 105 集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団
長滝歳康　1991　『白石古墳群・羽黒山古墳群』埼玉県児玉郡美里町教育委員会
水村孝行　1980『根平』埼玉県遺跡発掘調査報告第２７集　埼玉県教育委員会
宮島秀夫　1995　「銅釧・鉄剣出土の方形周溝墓　観音寺遺跡４号方形周溝墓」『比企丘陵』創刊号　比企丘陵文化研究会
村田章人・富田和夫　1994　『稲荷前遺跡（B・C 区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 145 集
村田健二　1982　『一般国道 ２５４号線東松山地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ―篭田・鶴田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 20 集（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村田健二　1990　『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 89 集
村松　篤　1991　『焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡』埼玉県大里郡川本町教育委員会
村松　篤　1994　『荷鞍ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書』川本町発掘調査報告書第８集
森田安彦　1998　『千代遺跡群―弥生・古墳時代編―』埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書２　江南町教育委員会

第１表　吉ヶ谷式甕集成表

No.	出土遺構	胴下半部器面調整		器形		文様施文部位			口唇部文様			輪積痕		類	器高（cm）	口径（cm）	胴部最大径（cm）	胴部の張り	長胴率
		A	B	1	2	a	b	c	無文	刻目	縄文	有	無						
1	高坂二番町遺跡1次12号住（19）	○		○			○		○			○		A1b	23.1	11.8	17	1.44	1.36
2	観音寺遺跡4号方形周溝墓（４）	○		○			○		○			○		A1b	30.5	14.4	19.5	1.35	1.56
3	観音寺遺跡4号方形周溝墓（６）	○		○			○			○		○		A1b	21.1	12.4	15.1	1.22	1.40
4	花影遺跡第2号方形周溝墓（２）	○		○				○		○		○		A1c	10.3	7.2	7.8	1.08	1.32
5	八幡遺跡６次２住（６）	○			○	○			○				○	A2a	38.3	18.6	23.7	1.27	1.62
6	高坂二番町遺跡1次12号住（14）	○			○	○				○			○	A2a	16.2	11.4	12.5	1.10	1.30
7	船川遺跡3住（１）	○			○	○				○			○	A2a	26.5	15.2	15.9	1.05	1.67
8	観音寺遺跡4号方形周溝墓（７）	○			○	○				○			○	A2a	33.5	19.6	25	1.28	1.34
9	高坂二番町遺跡1次12号住（13）	○			○	○				○			○	A2a	29.9	17.5	19	1.09	1.57
10	観音寺遺跡4号方形周溝墓（５）	○			○		○			○		○		A2b	38.6	20.6	24.6	1.19	1.57
11	高坂二番町遺跡1次12号住（18）	○			○		○			○		○		A2b	30.4	15.7	19.7	1.25	1.54
12	観音寺遺跡4号方形周溝墓（３）	○			○			○		○		○		A2c	29.2	18.3	18.7	1.02	1.56
13	白草遺跡78号住（３）	○			○			○			○		○	A2c	19.9	12.8	15.2	1.19	1.31
14	白草遺跡15住（４）	○			○			○			○		○	A2c	23.7	13.8	18.2	1.32	1.30
15	中耕遺跡第53号方形周溝墓（３）		○	○			○		○				○	B1b	31	12.6	21.2	1.68	1.46
16	大西遺跡62住（16）		○	○				○			○		○	B1c	30.5	14.5	25.6	1.77	1.19
17	富士山遺跡26号住（２）		○	○				○			○		○	B1c	14.5	9.5	12.4	1.31	1.17
18	四反歩遺跡南地区第3号住（１）		○		○			○	○				○	B1c	10.1	5	8.4	1.68	1.20
19	焼谷遺跡第1号住（３）		○		○			○	○				○	B2c	16.5	13.4	15	1.12	1.10
20	大河原遺跡5区1号住（４）		○		○			○	○				○	B2c	18.3	12.5	14.4	1.15	1.27
21	大河原遺跡5区1号住（５）		○		○			○	○				○	B2c	16.2	10.8	13.6	1.26	1.19
22	大河原遺跡第６号住（３）		○		○			○	○				○	B2c	19.5	12.4	16	1.29	1.22
23	稲荷前遺跡C区5号方(15)		○		○			○	○				○	B2c	25.1	13.1	20	1.53	1.26
24	吉ヶ谷遺跡住居址（３）		○		○			○		○		○		B2c	17	11.2	13.8	1.23	1.23
25	大野田西遺跡6住（１）		○		○			○		○		○		B2c	24.2	14.7	16.8	1.14	1.44
26	吉ヶ谷遺跡住居址（５）		○		○			○		○		○		B2c	30	17	20	1.18	1.50
27	上組Ⅱ遺跡113号住（１）		○		○			○		○			○	B2c	22.4	14.8	18.8	1.27	1.19
28	大西遺跡62住（11）		○		○			○		○			○	B2c	13.7	9.3	11.1	1.19	1.23
29	吉ヶ谷遺跡住居址（４）		○		○			○			○		○	B2c	24.9	13	15	1.15	1.66
30	伊勢原遺跡３次3号住（１）		○		○			○			○		○	B2c	25.4	14	17.6	1.26	1.44
31	伊勢原遺跡３次3号住（２）		○		○			○			○		○	B2c	27.8	16.1	22.4	1.39	1.24
32	上組Ⅱ遺跡36号住（３）		○		○			○			○		○	B2c	18.4	11.2	14.2	1.27	1.30
33	姥ヶ沢遺跡8号住（３）		○		○			○			○		○	B2c	26.7	13.9	18.8	1.35	1.42
34	円阿弥遺跡15住（２）		○		○			○			○		○	B2c	19.2	10.2	13.9	1.36	1.38
35	篭田遺跡７号住（２）		○		○			○			○		○	B2c	18.3	10.9	15.2	1.39	1.20
36	白草遺跡77号住（１）		○		○			○			○		○	B2c	19	12.4	14	1.13	1.36
37	白草遺跡59号住（10）		○		○			○			○		○	B2c	24.7	13	18	1.38	1.37
38	白草遺跡83号住（６）		○		○			○			○		○	B2c	25.2	13.1	16	1.22	1.58
39	白草遺跡141号土抗（２）		○		○			○			○		○	B2c	25.9	15	17.6	1.17	1.47
40	反町遺跡196住(55)		○		○			○			○		○	B2c	29.1	14	18.6	1.33	1.56
41	根平遺跡4住（３）		○		○			○			○		○	B2c	18.4	11.6	14.4	1.24	1.28
42	根平遺跡4住（２）		○		○			○			○		○	B2c	24	14	17.6	1.26	1.36
43	根平遺跡4住（１）		○		○			○			○		○	B2c	29.2	16.8	25.2	1.50	1.16
44	屋田遺跡第21号住（３）		○		○			○			○		○	B2c	10.8	7.6	8.6	1.13	1.26
45	屋田遺跡15住（１）		○		○			○			○		○	B2c	18.3	11.2	15.9	1.42	1.15
46	屋田遺跡21住（２）		○		○			○			○		○	B2c	19.7	11.8	14.8	1.25	1.33
47	屋田遺跡21住（１）		○		○			○			○		○	B2c	29.8	15.8	22	1.39	1.35
48	焼谷遺跡３住(23)		○		○			○			○		○	B2c	18.7	11.6	13.4	1.16	1.40
49	焼谷遺跡４住(2)		○		○			○			○		○	B2c	23.8	14.2	17.4	1.23	1.37
50	焼谷遺跡３住(21)		○		○			○			○		○	B2c	32.9	17.8	23	1.29	1.43
51	中耕遺跡第58号方形周溝墓（２）		○		○			○			○		○	B2c	27.5	13.5	19.1	1.41	1.44

第２表　共伴資料にみる吉ヶ谷式甕の変遷

出土遺構	岩鼻式			吉ヶ谷式										土師器甕	本稿	柿沼編年（柿沼2016）	
	A2a		A2b	A1b		A1 c	A2 a	A2 b	A2 c	B1b	B2 c						
柊遺跡3区1号住	○★	○★△													岩鼻式期	岩鼻式2期	新
相撲場遺跡1号住		○★△														岩鼻式3期	新
八幡遺跡6次2住		○★△					○★△										
船川遺跡３号住							○★△									吉ヶ谷１式	1
高坂二番町遺跡1次12号住		○★△	●★△	●★			○★△	●★△									
観音寺遺跡4号方形周溝墓				●★	●★△		○★△	●★△	●△						①		
花影遺跡2号方形周溝墓						●★△											2
駒掘遺跡5号住									●★△								3
吉ヶ谷遺跡住居址									●★▲		○☆△	○☆▲				吉ヶ谷２式	1
駒掘遺跡11号住											○☆△						2
大西遺跡62号住											○☆△	○☆▲					
焼谷遺跡3号住												○☆▲			②		
上組Ⅱ遺跡36号住												○☆▲		○		吉ヶ谷系	1
屋田遺跡15号住												○☆▲		○			2
根平遺跡4号住											○☆△	○☆▲	○☆	○			
中耕遺跡53方										○☆▲				○	③		
大河原遺跡5区1号住													○☆	○			3
大河原遺跡5区6号住													○☆	○			
稲荷前遺跡C区5号方													○☆	○			4

凡例	
	○：輪積痕なし
	●：輪積痕あり
	★：下半部整形刷毛目
	☆：下半部整形ヘラミガキ
	△：口唇部に刻み目
	▲：口唇部に縄文施文